新 年 を 迎 え て

作 井 誠 太*

明けましておめでとうございます.

(1) 我々の日本鉄鋼協会は，本年2月4日に創立 60 周年を迎えます. 60年は私の年令よりもかなり若く，西独の鉄鋼協会は本年で 115 年目，英国鉄鋼協会が昨年金属協会に改組した時は創立 105 年目で，何れも壮年期の活気を呈していますから，当協会は青年期にあると言えましょう.

本年4月にはその式典と祝賀会が東京で，国際的な規模で盛大に行なわれます. 会員諸兄の積極的な御参加と御声援を御願い致します. この 60 周年を記念して，本会会誌「鉄と鋼」は特集号『鉄鋼生産技術の進歩』を3月 15 日に発行致します. また 60 周年を契機として来たる 10 年間に鉄鋼情報センターの設立と，鉄鋼基礎共同研究会の飛躍的な拡大と充実が実現するものと期待されています. 後者は我が国の公私の大学と研究所における鉄鋼の研究の大きな躍進に寄与するものと考えます.

(2) 1970 年 9 月に当協会の主催で，鉄鋼科学技術国際会議 (ICSTIS) が開催されたことは，皆様の御存じの通りであります. その際西独代表から，この立派な会議を今回のみで終らせることなく，次回を4年後に西独で開催したいとの申出がありました. その4年目の会議が昨年5月 27 日から 30 日に亘つて，西独デュッセルドルフ市のライン河の畔りで開かれ，当協会からは伊木共研幹事長，2，3の理事の方々，田畑専務理事が参加され，私もお伴致しました.

東京会議が7部門にひろがる広範な対象を扱つたのに対し，今回は的を絞り，「製銑製鋼の冶金技術」なる副題を有する「鉄鋼国際会議」の名称で開催され，会場も大会場が一つだけで，全参加者がそこに集まり討論する形式をとりました. 参加登録人員は 38 ヶ国から 1100 余名で，その中 542 人が西独からで，日本からも 50 人近くが参加しました. 第一回の会議を発起し，主催した日本鉄鋼協会を代表して，私も開会式に挨拶を致しました.

会議の前日の5月 22 日には，マクス・プランク鉄鋼研究所で「金属-スラグ-ガス系の冶金反応の動的機構と熱力学」を主題として日独ゼミナーが開かれ，また会議終了後の5月 31 日と6月1日の両日に亘つて「製鉄の実際的問題」(技術的ならびに理論的基礎) なるシンポジウムがアーヘン工科大学で開かれ，熱心な討論が交換されました. この種の討論会を今後日独両国間に定着させたいと，両国の主催者は希望していました.

なお第3回の鉄鋼国際会議は米国で開かれることに決定しました. 当協会の昨年の国際的な活動としては，以上の他に田畑専務理事が下記の会合に出席しました. 4月英国ロンドンで金属協会の設立総会，9月シンガポールで東南アジア鉄鋼協会の年例シンポジウム，10 月コロンビアのボゴダにおける第 14 回ラテンアメリカ鉄鋼協会総会，同じく 10 月西独ミュンヘンにおける国際鉄鋼協会の総会と会議，御苦労様でしたが，当協会の国際的活動に大きく寄与しました.

(3) 春の講演大会では米国の MIT の J. F. Elliot 教授，ソ連のモスクワ鉄鋼合金大学の V. I. Yavoiskiy 教授が当協会の名誉会員に推挙されました. Elliot 教授は特別講演として「液体金属中での脱

* 日本鉄鋼協会会長

酸生成物の形成」，また湯川記念講演として「脱酸生成物の形状と大きさ」の二つの講演をされました．同じく春の講演大会でペンシルバニア大学の R. Maddin 教授の「1000 B. C の近東における初期鉄冶金について」，秋の講演大会にスエーデンの王立工科大学の S. Eketorp 教授の「将来の製鋼工場と鋼研究プログラムに対する提案」の特別講演があり，会員に感銘を与えました．

春，秋二回の講演大会に，恒例的に世界第一流の技術者または研究者を招いて，十分に準備された講演を聞ける慣習が定着したら，どんなに有難いことでしょう．

（4）昨年4月の新任御挨拶において，私は当協会が生産現場と大学，研究所の会員の間に，または会員同志の間に「対話のある協会」であり，また常に会員が自由に出入して，情報を得たり，自己教育の便があり，また社会に対しても「開かれた協会」でありたいと希望致しました．その際私は無意識の裡に，若い会員の方々を対象においてお話をしていました．協会の事務当局に1万人を越える当協会の会員の年令分布曲線の作成を依頼していますが，極く概算では 20 年代と 30 年代の会員の合計は，全会員の 60% を越しています．この若々しい研究者と技術者の群が，日夜を問わず研究所または現場に，鉄鋼と格闘しておられると思います．その技術と研究の実践の中から，そのスキンシップの中から種々の経験的な法則を見出し，それを現代科学の原理を組み合わせて，我国の急速な技術の進歩を招来しているのだと思います．私はこの実践する若い人たちの群こそ，日本の鉄鋼技術を支える隅のかしら石だと考えています．ラザフォードは「実験というものが，一個人の，あるいはさらにいいことには，さまざまな心的傾向の個人たちの集まりの，訓練された想像力によつて導かれる時，それは最大の哲学者の単独の想像力をはるかにしのぐ結果に到達することができるのだ……(中略)……かくてその後に全般的な前進が続くのである」と言つていますが，この言葉は当協会の若い人々の実践の姿を描いているのではないでしょうか．そしてこのような会員諸兄にサービスせよと，無名の私がすみなれた実験室から会長に選ばれているのだと考えています．

英国の金属協会の初代会長は，昨年4月の就任挨拶で，一般会員が旅費その他の費用のかからぬ会合をしばしば持つこと，たとえば地方支部の会合を盛んにすることが，学協会としては一番大切なことであり，年に2回から3回の大会を開くだけで安心していてはいけないのだ．理想的には，学協会は常時非公式に交流のできる開いた場所でなければいけないと申しております．

（5）以上のような私の発言は，他のいろいろの私の一見もつともな発言と同様に「言うは易く，行なうは難し」なる言葉を思い出させます．しかし私は決して失望せず，根気よく努力を積み上げて行くつもりであります．一歩でもそれに近づき，どんなにかすかでも足跡を残したいと願つています．弘法大師の法語に「一塵大嶽を崇くし，一滴広海を深む」とあります．明治生まれの人間の慣習に従い，一言新年の志を述べて御挨拶と致します．会員諸兄の御健闘と御多幸を心から御祈り致します．